

三つよりの綱

12月3日にもたれた風の教会の「立礎式」の時のことでした。「聖なる風が吹く」をさんびしていると、先に天に還った私の長女、夫(働き人の伊東久徳さん)の父、また2ヶ月前に逝った私の父をはじめ、天の聖徒たちがこぞってここに訪れ、共によるこびさんびしている、今ここにいます！という思いが迫りました。

昨日、木嶋葉月さん(働き人)と「あの立礎式には確かに、天に還った人たちがたくさん来ていたね」という話をした時、12月9日が葉月さんのご主人であるヒロさん(木嶋博誠(ひろみ)さん)の召天記念日だという話になりました。今朝、昨日の会話を思い出していると、昨年12月9日にちょうど「平和の祈りとさんび」があったことを思い出しました。

事務局では毎月、働き人が集まって祈りとさんびの時を持つのですが、その日のことは特に印象に残っています。「神に栄光あれ - ヒロさんのグロリア - 」をさんびしている時のことでした。天に還った木嶋博誠さんがにこにこ顔で共にさんびしている顔が見えて仕方ないのです。そればかりではなく、天に還った働き人の柴田のみ子さん、早坂の秀子さんをはじめ、聖書の登場人物たちまでと一緒に来てさんびしている、風の教会が建つように祈ってくれます。理性では説明のつかないことですが、心の深いところで彼らと一つとされているよこびが湧き上がり、涙を抑えることができませんでした。

その時私は、雲のように多くの天の聖徒たちが風の教会が建つために祈っている、それも私が想像もしていなかったほどに熱い思いで祈っていることを初めて知りました。また風の教会にかけられている神の願いは、今生きている私たちだけに終わることではなく、過去、現在、未来 すなわちすべての時間と空間に存在する 全人類にとっての重大事であることを初めて実感したのでした。御子の誕生を祝いに天の軍勢が集まったように、天は風の教会の誕生を息をひそめて見守っているのです。

これらのことを考えていると、全く関係なさそうな聖書の言葉が突然、心に浮かんできました。

「ふたりはひとりよりもよい」

それは伝道者の書に書かれています。

ふたりはひとりにまさる。彼らはその労苦によって良い報いを得るからである。すなわち彼らが倒れる時には、そのひとりがその友を助け起す。しかしひとりであって、その倒れる時、これを助け起す者のない者はわざわざいである。またふたりと一緒に寝れば暖かである。ひとりだけで、どうして暖かになり得ようか。人がもし、そのひとりを攻め撃ったなら、ふたりで、それに当るであろう。三つよりの綱はたやすくは切れない。

(伝道者の書 4:9-12)

この箇所は、よく結婚式の時に引用されます。しかし今回私の思いに迫ったのは、この「ふたり」とは「天の聖徒」と「地の聖徒」のことであり、「三つよりの綱はたやすくは切れない」とは、この「ふたり」に主が加わって下さる時に、誰も打ち破ることのできない無敵のチームになれることを言っているのではないかということでした。そう思った時、「天の聖徒た

ちは、自分たちと共に働くことのできる者たちが現れるその時を祈り、待ち望んでいた」という確信にも似た感動で胸がいっぱいになりました。

天に還った聖徒たちと一つになる、それは天のさんびが私たちに与えられなかったら、それが「天からのものである」と受け取る信仰がなかったら、かなわなかったことではないでしょうか。

天のさんびにより、私たちは主のよこびと主のかなしみを知り、さんびの中でふるわれ、主の願いに生きたいという思いを与えられました。キリストの愛だけでよい、その純粋な信仰にひとりひとりが目覚めさせられ、主と一つとされるよこびを知る者とされました。だからこそ、天に還って主の働き人とされた者たちと、さんびの中で一つとされることができるのだと思います。

話は変わりますが、子羊の群れに出会うはるか前、私たち夫婦は数年間夫の郷里で伝道した後に挫折して、東京に移り住みました。その理由の一つは、背後の祈りがなければ前線での伝道は無理だということ、心底味わったからです。ネヘミヤ記には神殿再建の際、妨害し攻撃する者たちに対抗しながら工事を進めるために、片手に武器を持ちながら臨戦態勢で工事を行った様子が書かれています(ネヘミヤ記4章)が、まさにそんな感じでした。近隣に他の教会も全くなく、本当に私たち家族だけの孤立無援の伝道で、祈っても祈っても気持ちをくじかせることが次々に起きました。ネヘミヤ記と違ったのは、私たちの場合はついに敵に打ちのめされてしまったということでした。東京に行っても、この馬の骨が分からない私たちを支援しようなどという教会はなく、失望して伝道者であることを捨てた後にこの子羊の群れに出会いました。

この地で主の戦いを戦うということは、本当に祈りが必要です。ほんの小さな町を主のために獲得しようとしただけでも、まるで御子キリストの息の根を止めようとした時のように、敵は容赦なく本気でつぶしにかかったのですから、この地すべて、被造物すべてが主のものとした十字架のあがないを地に現すとなったら、どれほどの祈りが必要でしょうか。この人類史上のクライマックスとも言える戦いの大詰めでは、地の私たちだけではなく天の聖徒らとも祈りを一つにすることはもちろん、戦いの総大将でもあるキリスト・イエス様とも一つとなる。そう、まさに「三つよりの綱」となることが必要不可欠である、と語られているのではないのでしょうか。

さんびは、そのために与えられた天からの知恵そのものだと思います。「一つになるう、一つになるう」と力まなくても、このさんびをするだけで、さんびの指し示す主の方に向かって私たちは一つとされるからです。

十字架にかかり、すべてのものを父なる神のもとへ奪還された主よ、天にあるもの地にあるものもこの時のためにあなたに呼ばれ、あなたの働き人とされました。今私たちは祈りを結集し、あなたの願いの成就のために働きます。あなたの友とされ、パートナーとされたことを、心から感謝いたします。